

我が街の記念碑

JR高尾駅舎

八王子市



重厚なつくりの高尾駅舎

【八王子・大工・山田光政 通信員】白壁に黒基調の柱。屋根の鬼瓦と懸魚(げぎよ)。臺股(かえるまた)まで見られる小ぶりのながら重厚なつくり、木造平屋建てで間口40m、奥行7m。JR中央線高尾駅の駅舎です。



駅は「八王子駅」と言っても、高尾駅であることは隠していません。高校を卒業して利用することがなくなってきたから、

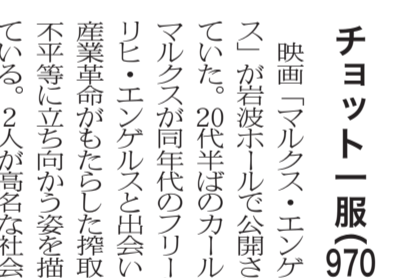
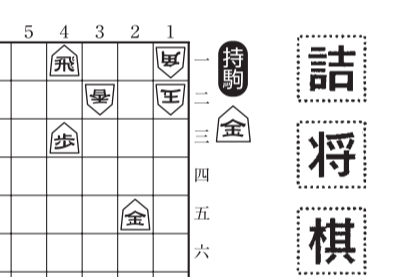
私の住んでいる地域の最寄り駅であり、集場所として、多く使われる所です。中学生までは、ほとんど利用するところがなく、古い駅舎がみっともないと感じていました。高校に通学するために利用していた頃は、友達に最寄りの

移設前に会いに来て 神社の拝殿級の純和風造り

昭和2年、大正天皇崩御の際、八王子の東浅川駅(現在はありません)までひつぎを送り出すために、新宿御苑内に仮駅として造られました。その後、昭和36年高尾駅に移築されました。

ここ数年、高尾山が世界的に有名になり、その表玄関として高尾駅周辺も観光客が多くなり、外国人観光客の姿も珍しくなりました。駅周辺のお店も、テレビや雑誌で紹介されることが多くなってきました。

高尾駅は今まで、南北移動ができない不便がありました。それがこれから南北自由通路が建設されることになり、地元の人には大歓迎でしたが、建設に伴い駅舎が東に1500mの所に移設されることとなり、とても寂しくなりました。駅舎としても現役中の高尾駅にぜひ、会いに来て下さい。



映画「マルクス・エンゲルス」が岩波ホールで公開されていた。20代半ばのカル・マルクスが同年代のフリードリヒ・エンゲルスと出会い、産業革命をもたらした搾取と不平等に立ち向かう姿を描いている。2人が高名な社会主義者と論争し、労働者の賛同

人生が2度あれば…。井上陽水の歌ではないが、生きていけば誰もこんなことを考えたことがあるのではないかと。それが2度ならず、永遠に続くとなればどうだろうか。しかも、すぐに殺されてしまうだけの人生だとしたら、やり直すのも考え物かもしれない。

親父の背中…それも真っ赤に日焼けして水膨れした…。今の私の歳の頃、私の父も港支部の役員をしていて当時の仲間の皆さんと日夜、組合活動に精を出していました。という事は、仕事以外の時間のほとんどはなんらかの形で

ひとしきり泳いだ後は、恒例のスイカ割りです。砂にまみれたぬいスイカを口いっぱいに頬張り、タネをべっぺ

を勝ち取って「共産主義者同盟」を立ち上げるシーンがとても印象に残る。哲学者は世界を解釈してきただけ、重要なのは変革することだと気づいたマルクスは労働者の怒りを組織した。マルクスは1999年のBBC世論調査で20世紀にもっとも影響を与えた偉大な思想家と選ばれたそうだ。

2014年7月日本公開の『オール・ユー・ニード・イズ・キル』は、『エッジ・オブ・トゥモロー』という題名で公開された。ダグ・リーマン監督による、タイムループをモチーフにしたSF映画である。

父の背を見て絶句 組合行事の海水浴の後

活動の延長線上にあり、家族の外出は常にその中で、という「土建ファミリー」でした。夏のイベント(当時は行事)で海水浴に大勢で出かけました。海の家を借り、暑い砂浜にはたくさん子どもたちが賑やかです。昭和40年生まれ私の世代に少子化なんて言葉はありません。そこらじゅう子どもだらけです。

一日行事が終わわり、バスに乗って家に帰れば海塩を流すために風呂に飛び込みます。その時です。ほとんど火傷に近い父の背を見て子どもながらにあまりの痛々しさに言葉が失いました。日焼け止めやラッシュガードなどなじみの無い時代の事です。他の役員の皆さんの子どもたちもきつと自分の父親の背中を見てびびくりしたでしょう。それでも笑っていた父の背中を忘れる事ができません。(港)

見どころは、戦場に出たこともなかった臆病で軟弱者の主人公の劇的成长ぶりだろう。最初の戦闘であったが、目を覚ますと出撃前日に、そして、出撃しては戦死する2日間

内装 出井章史

そもそも円覚寺の境内を横切る横須賀線のレールが敷かれたのも、海軍の要請で許したのであって、あくまでもお国のためだ。それを忘れて、図に乗りすぎた申し入れたと怒った。

つと飛ばす事は今では懐かしい盛夏の景色。そして最後はお楽しみのお宝探しの時間です。役員の皆さんが番号札を砂に埋め隠し、ヨーイドン! 子どもたちが探し当てた札とおもちゃを交換してもらう企画です。これらの準備のために大人たちは炎天下の中、常に暑い太陽の日差しに照らされてきました。

人生が2度あれば…。井上陽水の歌ではないが、生きていけば誰もこんなことを考えたことがあるのではないかと。それが2度ならず、永遠に続くとなればどうだろうか。しかも、すぐに殺されてしまうだけの人生だとしたら、やり直すのも考え物かもしれない。